

青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

第4回

奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

第3章 戊辰戦争（続き）

長岡藩河井継之助との会談決裂

そのころ、長岡藩の河井継之助は、信濃川を挟んで目の前まできた新政府軍への対応をどうすべきか、ぎりぎりの決断を迫られていた。

5月2日、河井は、小千谷の北陸道軍先鋒の本営に花輪彦左衛門を使者として派遣し、

「ぜひ、嘆願したいことがある」

と申し入れた。この願いは、すぐ聞き届けられた。

河井は、清隆や山県に会えれば、長岡藩をめぐる重大な局面に、何らか進展が図れるだろうとの期待を胸に、指定された場所（慈眼寺）に向向いた。しかし、河井の意に反して、対応したのは監軍岩村高俊であった。

岩村は、のちに開拓使の大判官として活躍する岩村通俊（土佐）の弟であるが、このときは弱冠



河井継之助（長岡市立中央図書館蔵）

23歳。河井という人物を知らず、しかも多数の兵を統率する立場とあって、いやがうえにも虚勢を張っていた。

麻の袴を着けた河井は、理路整然とした口調で、「当藩内にもいままで様々な意見があり、出兵、献金に応じられなかったのです」

と率直に詫び、和平の嘆願書を差し出した。

しかし岩村は言下に河井の嘆願をはねつけた。かねてから長岡の内情も探っていたが、皆、長岡藩に叛意があるとの報告であった。

（河井の話はいくさ仕度を整えるための時間稼ぎか、謀略に違いない）

と見たのだ。

河井はなおも岩村の裾をつかんで必死に訴えた。しかし、岩村はこれをも冷淡に振り切って、奥に消えてしまった。

こうして長岡藩の命運をかけた会談は、30分余りであっけなく決裂した。

このあとも河井は、何度も本陣の門に来て再度の面会を請い、深夜まで付近を徘徊するなどして、取り次いでくれるよう求めた。しかし新政府軍の衛卒は、頑としてこれに応じなかった。

河井は非常に落胆した。自分の期待は、見事裏目に出てしまった。

（このうえは是非もない。長岡藩の総力を挙げた決戦もやむを得ない）

と覚悟した河井は、決然とした面持ちでこの場を退去した。

このとき、沿道の新政府側諸隊は殺気に満ち、「河井、戦場で会おう。早く帰って戦争の準備をしろ」

と罵声を浴びせてきた。

清隆は柏崎でこれを聞き、すぐ河井宛てに情誼を尽くした手紙を送り、熱心に和平を説いた。

しかし、河井からはなしのつぶてであった。清隆は内心、河井という男の無礼を憤った。

一方、山県の回顧によると、河井が来るという情報が小千谷に移動中の山県に入り、すぐさま使者を派遣し、河井を陣中に留め置こうとしたが、すでに退去したあとであったという。（山県有朋「越の山風」）しかし、河井を捕らえようとしたともいわれるなど、主戦論に立つ山県の本音は、はかり知れない。

このあと長岡藩は正式に奥羽越列藩同盟に参加

し、会津藩、庄内藩などとともに、本気で新政府軍に抵抗していく。

後年、清隆は、河井の相続人となった森源三（のちの札幌農学校長）から、この手紙は途中で失われ、結局、河井には届いていなかったことを知らされ、たがいに天を仰いで、その不運を嘆いたのだった。

山県有朋との確執

慶応4年（1868）5月初め、長岡の南方、朝日山、榎峠付近で激しい戦闘が起きた。

朝日山では、参謀補・奇兵隊司令の時山直八（長州）が戦死した。山県が、後方からの増援を呼びにいくため前線を離れている、わずかの間に起きたできごとであった。

その遺体は後送するいとまもなく、首級のみが持ち帰られた。

これを見た山県は、激しい衝撃を受けて身体が震えた。

時山直八は自分と同門の吉田松陰門下生で、年は31歳と若い、長州のこれからを担っていくはずのエリートであった。彼を死なせたのは、木戸孝允に叱責されうる大失態である。

もともと西郷の方針に沿って、和平の糸口を探りたかった薩摩側は、いったん兵を後退させて、陣容の立て直しをすることを主張した。

山県も西郷の方針は承知していたが、一方で長州軍の実力者大村益次郎の方針は、殲滅戦である。しかも時山を亡くし、山県にも不満と意地がある。

複雑な心境にあった山県は、かたくなに退却に応じなかった。

新政府軍は、薩長均衡の建前から、両頭指揮の弊に陥らざるを得なかった。

さきに大山綱良、世良修蔵がともに薩長を代表して会津攻撃に出動したが、両者は全く別々に行動し、とくに世良は極端に評判が悪く、ついには暗殺されてしまった。

ここ北越でもいま、進むか退くかで薩長は決裂、リーダーシップ争いが表面化したのだ。

ところが、このさなかの5月14日、柏崎の陣中であつた清隆は、突然病の床に臥してしまった。

戦陣にあつてきわめて異例なことだが、清隆はやむを得ず瀨辺高照を自分の代理に指名して、しばらく前線を離れた。

山県は清隆に対する憎悪をつのらせながらも、榎峠の長岡軍を攻めた。一方の河井の率いる長岡軍も、全力を尽して反撃につとめた。

そのうち、後方にある長岡藩の本拠、長岡城の守りが手薄になり、清隆配下の三好軍太郎（長州）が山県に対し、

「敵の裏をかいて長岡城を衝いてはどうか」

と進言した。三好は長州の奇兵隊出身で、時山の戦死後は、彼に代って指揮をとっていた。

薩摩側の多くは、これに反対した。

山県は儀礼として使者を病床にある清隆のもとに派遣して、意見を求めた。

ところが、ここで大きな問題が生じた。功を焦った三好は、その間に独断で信濃川の渡河を敢行し、長岡軍の不意を衝いて襲いかかったのだ。

三好の軍は、敵の本拠長岡城を攻めに攻めた。こうしてついに城の奪取に成功してしまった。

長岡軍は、いったん北方の加茂に退いた。

山県は、苦笑せざるを得なかった。

清隆とすれば、これが山県と三好の暗黙の了解のもとであつたか否かは不明だが、清隆はそれを疑わざるを得なかった。

しかし陣中には、自分が病臥中に、山県に対し意見をいい辛い雰囲気ができあがっていた。

山県は、薩長連合のときとは違い、清隆にとって実に組じづらい相手であつた。

一方の山県も、清隆に対する不信感をいっそう募らせていた。

このとき深まった2人の溝は、終生埋められることがなかったのである。

こののち新政府軍中枢は、岩村高俊を監軍から一軍曹に降格させた。岩村はこれに怒って辞表を出したが、山県は結局、その辞表をおし止めた。

やがて山道、海道両軍は長岡城で合流、6月14日には清隆も病から回復して、前線に復帰した。

同時に山県は一時、全権を清隆にゆだねて参謀を辞任している。

のちに山県は、

「黒田に対する長州人の不満は実に非常にして、殆ど得て制止すべからざるものあり。…参謀を辞して奇兵隊の一人として行動するの一身に愉快なるは勿論、結局朝廷の為にも忠義となるべきを思惟し、断然辞表を提出したることもありしなり」（山県有朋「越の山風」）

といい、また別のところでは、
「私の苦心したことは、薩と長との間に往々意志と感情の衝突があって、随分骨が折れた」(同「維新戦役実歴譚」)

と2人の関係を吐露している。

ここで、山県有朋(狂介)という人物について、ふれておきたい。

山県は、天保9年(1838)萩城下川島の庄に生まれた。父は山県有稔ありとしといって、蔵元付き仲間、つまり足軽以下の最下層卒族そつぞくで、町で士分の者に出会うと、土下座して挨拶しなければならぬ身分であった。

5歳のとき母松子を亡くし、祖母と継母うとに育てられた。生活は貧しいうえに、この継母に疎まれ、かなり不幸な幼年期を送った。

こうした生い立ちのためか、山県は非常に孤独で、すべてに用心深い性格であった。

(この暗い、みじめな境遇から脱け出し、何としても立派な武士になりたい)

という思いが、そのすべてのパワーの源になったと見られる。

安政5年(1858)6月、21歳のとき、藩命で伊藤博文らとともに京都に派遣されて以来、尊王攘夷運動に参加し、10月、久坂玄瑞の紹介で松下村塾に入門した。

師の吉田松陰は、山県の気迫や根性を認めてはいたが、

「優れた人物に使われてこそ真価を発揮する」

と評している。

創意という点では凡庸であるが、その代わり実行者としての能力には優れたものがある、と見たのだ。



山県有朋(萩往環公園に立つ維新の群像から。
財松風会、写真提供：(社)萩物産協会)

松下村塾時代のエピソードとして“塾四天皇”の一人といわれた吉田稔磨としまるの判じ絵の話が残っている。

あるとき、吉田が入塾したばかりの山県の目の前で、絵を描いて見せた。鼻輪を通していない牛、袴かみしもを着た坊主頭の人物、その横に木剣、最後に1本の棒切れの絵を次々と描いた。

牛は高杉晋作、坊主頭は久坂玄瑞、木剣は入江九一いりえ。そして最後の棒切れが山県で、木剣にも及ばぬという意味だったようだ。

後年、山県は、好んでこの話を口にした。例え、棒切れとはいえ、評価に値する人物と認められたのが、誇らしかったのだ。

その後、高杉晋作の配下となり、士農工商を問わずに編成した長州藩独特の「奇兵隊」に加わった。

奇兵隊発足時に四番隊長となり、27歳のとき同隊軍監ぼつてきに抜擢され、前述の下関事件における列国艦隊との戦争を経験した。

このときは完敗したが、幕府との四境戦争では小倉城を陥落させる武勲をあげ、長州藩の指導者の一人として、その地位を不動のものにした。

軍政に長じた山県は、明治維新に貢献したが、すべてに慎重で誰にも気を許さない性格が祟たたって、ほとんど誰からも愛されなかったともいわれる。

ここ長岡戦線では新政府軍は苦戦し、清隆と山県の意見はしばしば対立した。新政府中枢でもいたく心配し、新たに軍務官知事にんなじのみやよしあき仁和寺宮嘉彰親王(公家)を会津口征討越後口総督に任命したほか、3等陸軍将西園寺公望さいおんじきんもち(公家)を越後高田に派遣して、諸方面の戦線を固めた。

7月初めには、前原一誠いつせい(長州)、吉井友実ともざね(薩摩)の2人を参謀として追加し、派遣してきたが、薩長の反目は止まなかった。

ただ、吉井が前原と親密になった。吉井は清隆より10歳以上も先輩(西郷と同年)で、西郷の内意を受けて、まとめ役としてやってきたのだ。

岩倉具視が自ら出陣しようと上請したり、西郷が、

「清隆を殺させるな」

と北越へ出発したりしたのも、このころであった。

12日、清隆と山県、前原、吉井の四参謀は、これからの作戦について協議し、一方、鎮撫総督は柏崎に本営を置き、清隆と山県に感状を授け、賜金を与えて激励した。

清隆は、長州の山田顕義とともに海路新潟の北に上陸して、敵の背面を衝くこととなり、7月23日を期して進発することとなった。

一方、前原と山県は陸路、正面より新潟に迫ることになった。

再び長岡城を奪還

慶応4年（1868）7月24日夜、河井継之助の指揮する長岡軍は、八町沖（沼沢地）を抜け、新政府軍の立て籠る長岡城の不意を突いて急襲し、これを奪還した。

清隆はこの日、松ヶ崎に上陸、新発田藩に使者を出して帰順させ、その藩兵とともに一気に信濃川べりに進出した。

29日、正面軍は激戦の末、再度長岡城を占領した。このとき同軍は、河井が輸入したガトリング砲（六連装機関砲）の猛射を受けた。

しかしこの乱戦のさなかに、河井は突然、左の膝下に銃弾を受けて倒れ込んだ。

やむなく河井は退いたが、このときの傷がもとで、まもなく死亡してしまった。この瞬間、長岡軍は、42歳の名指揮官を失い、致命的な打撃を蒙ったのである。

一方、清隆は新潟の背面を牽制し、山県の正面軍とともにこれを陥れた。

8月に入って、越後一帯は、ようやく平定された。

そのころ、奥羽鎮撫総督下の新政府軍は会津攻めの最中であり、一方、仙台から庄内に向かった大山巖参謀らは秋田藩の兵を率いて戦ったが、これまた苦戦していた。

清隆と山県は兵を二分して、清隆は庄内攻略に向かい、山県は会津攻めに合流することになった。

西郷隆盛は、江戸城開城のあと鹿児島に帰っていたが、越後の戦況を憂い、また清隆の身を案じた。

彼は軍艦春日に手勢3百人を乗せて、8月10日、新潟の北方、松ヶ崎に上陸した。しかし清隆と山県は、すでに苦境を乗り切ったところであった。



ガトリング砲と河井継之助（河井継之助記念館蔵、写真提供：只見町役場）

ずっとのちのことであるが、長岡の郷党は長岡城跡に河井の顕彰碑を建立した。時の総理大臣であった清隆は、筆をとって、

「故長岡藩総督河井君碑」と書いた。

「河井が会談した相手が岩村のような人物でなく、清隆であれば、戦争しないで済んだかも知れない」

という見方があることは、よく知られている。清隆は、一見「こわもて」風でありながら、実はかなり柔軟性に富んでおり、軍略的な判断に長けていた。

profile

奥田 静夫 おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男―松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞（雑誌「クオリティ」同年4～12月号連載）。
